



鼠

— Rats —



『でも、いまあなたが寝室にはいったとしてです。ぼろの黴<sup>か</sup>びた夜具が、まるで浪のように、ムクムク持ちあがるのをごらんだったとしたら、どうですかね。』『ムクムク持ちあがるって、なんで?』と、彼はきく。『はは、その下に鼠がいたためです。』――

だが、鼠で?と、私は反問する。ある場合、そうでなかったこともあるからだ。

この話は、いつのことだったか、はっきりしない。私が若い時に聞いたのである。話してくれたのは老人だった。それだけに、ひどくちぐはぐな話である。だが、ちぐはぐは聞いた私の罪で、話した老人の罪ではない。

それはサツフオークの海岸近くで起った話だ。道の起伏がむやみな

ところで、北へ向けて行くと、高みの頂上に、道の左側に一軒の家がたっている。高さだけの幅もない、ひよろりとした家で、たぶん一七七〇年頃にできたものらしい。前方のてっぺんには、低い三角の破風はぶがついており、そのまんなかにも窓がついている。家のうしろには既や物置があり、またそのうしろには、この家らしい菜園がある。骨張った縦もみの樹が、あたりにならび、そのさきは、針えにしだで蔽われた土地が、大きくひろがっている。戸口の前の柱には、看板がかかっている。かかってはいるものの、むかし評判の宿屋だったといっても、そんなに長い間だったとは思われない。

この宿屋へ、この話をしてくれたトムソン氏が、まだ若かった頃の或る晴れた春の日、ケンブリッジ大学から旅して行ったのである。独りで泊らしてもらって、読書の時間を得たかったのである。宿屋の亭主も妻君も、まめまめしく、よく客をもてなすのだった。その家には

一人の泊り客もなかった。トムソンは、道も景色も見晴らせる―もしその部屋が、東向きだったら、どうもそんなわけにはいかなかったのだが―二階の大きな部屋を与えられた。家は作りがよく、暖かだった。

トムソンは、毎日を、静かに無事にすごした。午前中は勉強し、午後は、あたりをひとまわりし、夜は、田舎の連中や宿の人たちと、しばらく話をし、水を割ったブランデーといった、その頃流行の飲みものをのみ、ちよつとばかり読書や書きものをして、それから床に就くのだった。で、トムソンは、これが一箇月中思うままに続いたら、満足だったはずである。仕事ははかどったし、その年の四月は、すばらしい天気だった。―この天気は信用していい理由がある。オルランド・ホイッスルクラフトの天候年表には、その年を“心楽しき年”として、記入しているからである。

トムソンが散歩する道の一つは、北に通ずる道で、高く、沼地ヒースと呼

ばれたひろい公有地を突っ切っていた。トムソンは、ある輝やかな午後、はじめてこの方向に足を向けたのであるが、ふと、道の左手、五六百ヤードかなたに、なにか白い物体を見かけた。なんだろうか知りたと思った。すぐそばへ近かざくと、それはなんだか角柱ピラーの土台らしくもある、まっ四角な白い石の一塊で、上方にもまっ四角な穴があいていた。ちょうど今日でも、セツトフォード沼地で、見かけるようなああした石である。それを調べたあと、トムソンは二三分、あたりの景色を眺めた。一つ二つ教会の塔が見え、五つ六つの赤屋根の cottages や、太陽の光線で、ピカピカする窓も見え、また、おりおり光る海のひろがりも見えた。―で、トムソンは、足を進めた。

その晩、宿の酒場での雑談にまぎれて、トムソンは、どうしてあの白い石が、あの公有地にあるのか、きいてみた。

『古風なしるものでね。あれがあすこに置かれた時代にや、わたし

達はみんなまだ生れていなかったんですよ。』と、ベッツという宿の亭主が言った。『ほんとに、そうですよ。』と、そこにいる男もいった。『ちよつと小高いところにあるが、あの上にはむかし航海標シー・マークが、たててあったのかも知れませんか。』と、トムソンが言うと、ベッツはうなずいて、『ああ。きつとそうですよ。航海標シー・マークが船から見えたとは、聞いたことがありますからね。だが、どんなものだったって、あすこにありやあ、長い間にや、朽ちっちゃいますよ。』と、いった。すると、またほかの男が口を出して、『朽ちてよかったよ。ありやあ、縁喜のいい目標めじるしではないって、いつも年寄り達が言っていたよ。縁喜のよくないってのは、漁にかけていうことなんですがね。』『どうして、縁喜が悪いのです?』と、トムソンがきくと、彼は答えて、『ええ、わたしだったって、その目標を見たことはないんだが、年寄り達は、わたしがいったような変な考えを持っていましたよ。ことさら、年をとった奴等はね。で、

わたしは、あれをたたきつぶしたのは、奴等にちがいないって、思うんでさあ。』

これ以上わかる話の種は、得られそうもなかった。この連中はあまり口軽るでないので、黙りこんだ。それから、誰かが村の財政や収穫について話し出した。ベッツが音頭取りだった。

トムソンが、健康上、田舎道を散歩したのは、毎日ではなかった。ある晴れた日の午後三時、彼は忙しく書きものをしていたが、やがて彼は伸びをして立ちあがり、部屋から廊下へ出た。向うに一つ部屋があり、そのさきに階段の上り口、またそのさきに、一つは裏へのぞき出し、一つは南へのぞき出す、二つの部屋があった。廊下の南の端には、窓があった。そこへ彼は、こないい午後を無駄にするなんて、不都合だと考えながら、あるいて行った。だが、ちょうどその時は、仕事が一番調だった時なので、彼は五分だけ気をぬいて、部屋へ帰る

うと思った。そしてこの五分を―ベッツ夫婦はべつにとめやしな―  
今までのぞいたこともない、廊下の部屋々々を見ることにあてようと  
思った。家にはまったく誰もいないらしかった。その日は市日マーケットデーだった  
ので、酒場に女中でも残っているほかは、みんな町へ出かけたらし  
かった。家はほんとにシーンとしていた。さしこむ日光は実に暑かつ  
た。蠅の子が窓硝子の中で、ブンブン唸っていた。そこでトムソンは  
探検にとりかかった。真正面の部屋は、聖エドマンド東アングリア  
王。八七〇年デー人人に擒われ、基督徒の信仰を棄てざりしたため斬首  
さる。の古ぼけた版画がかけてあるほかは、かわったこともなかった。  
廊下の、一方にあつて隣っている二つの部屋は、美しくきれいだった。  
彼の部屋には窓が二つあったが、ここはどっちも一つだった。そのあ  
との部屋と反対側の、のこりの西南の部屋へ、彼は入って行った。こ  
の部屋は、鍵がおろされていたのだが、トムソンは、まったく、むや



みな好奇心に駆られて、こんなわけなくもぐり込める場所に、なんのあぶない秘密なんかあるもんかと確信して、自分の部屋の鍵をとりに行った。そしてそれが手ごたえなかった時、また三つほかの部屋の鍵をとって来た。その一つがうまく合った。戸が開いた。部屋には、西と南をのぞむ二つの窓があった。それでなかは一杯にあかるく、日光は実に暑かった。どこにも敷物一つなく、ただむき出しの床板。額一枚もなく、手洗い台もない。ただ、ずっとむこうの隅に、ベッドが一つあるだけ。そのベッドは鉄製で、薄青い格子縞のおおいのかかった、蒲団と枕が置かれていた。

御想像の通り、なんのへんてつもない部屋―しかし、そこに、トムソンを大急ぎで、だが、とにかく落ちついて外へ出て、うしろにドアを閉めさせ、廊下の窓まどしきみへよっかかり、実際全身をガタガタ震えさせた、あるものがあつた。それは、おおいの下になにかねかされている

のだった。いや、ねかされているばかりでない。動いているのだった。それはだれかで、たしかになにかではなかった。というのは、首のかけが、まぢがいなく枕にのっかっているのだった。しかもその首は、すっかり蔽われていた。蔽われた首でねているなんて、死骸のほかにあるものでない。しかもこれは死骸ではなかった。たしかに死骸ではなかった。だってそれは、ムクムクもちあがって、ブルブル震えていたではないか。

もしトムソンが、これを薄暗がりか、チラチラする蠟燭の光で見たのだったら、彼はホツとして、妄想だと言っただろう。だがこのあかいる日中に、そんなことの言えた義理ではない。どうしたら？なによりもまず、ドアに鍵をかけた。おっかなびっくりで、ドアに身を寄せ、かがみ込み、息をのんで耳をすました。たぶんそこには、重っ苦しい呼吸のひびき、そして平凡な解釈があり得たばかり、あたりは、まっ

たくシーンとしていた。だが、また彼は、幾分わななく手で、ドアの穴に鍵を差し込んだ。そして唸った。ガチリと鳴った。―その途端、よろめくように踏んづける足音が、ドアのほうへやって来るのが聞えた。

トムソンは、まるで兎のように、自分の部屋へ逃げ込み、ドアに鍵をかけた。だが、それはたしかに無駄だとわかった。ドアとか鍵とかいったものが、彼の思ったような障碍物であるだろうか？だが、それは、その瞬間、彼の考えることのできたすべてだった。そして実際、なにごととも起らなかった。ただ、そこには、どうしたらいいかという、みじめな疑懼を伴う、するどい懸念の時があるだけだった。この衝動は、言うまでもなく、こんな恐ろしい「同居人」のいる家なんか、できるだけ早く御免蒙りたいということだった。だが、ついこの前日、彼は、すくなくももう一週間滞在しようと言ったのだった。それでた

とえ彼が計画を変えたといつたにしても、たしかに、用もない部屋を覗き見したという疑いを、どうしてまぬかれることができようか？その上、ベッツ夫婦が、あの「同居人」――まだ家を退散しない「同居人」について、なにかも知っているのか、或はまるで知らない――それは、つまりなにも恐るべきものはないというのと同じ意味だが――のか、或はまた、部屋を閉鎖すべきことは、十分承知していながら、それにしても心配の種というまでにはならないのか、いずれにしても、それはさほど恐るるにあたらぬようにも思われた。そしてたしかに、そこまでのところトムソンは、なにも嫌な経験をしたわけではなかったのである。大体からいって、さし障りのない限り、滞在すべきであった。で、トムソンは、その週間中滞在した。どうしてもあのドアのことが、忘れられなかった。時々彼は、ためらいはしたが、昼でも夜でも、静かな時に廊下で、ジツと耳をそばだて、あの方向から来る音は、す

こしも聞きのがすまいとした。読者は、トムソンが、この宿屋に関係した話を、たぶんベツツでは駄目だが、教区の牧師なり、村の老人達なりから、狩り出そうという或る企てをしただろうと、考えられるかも知れない。だが、いや、奇怪な経験をもち、またそれを信じた人の、普通陥る沈黙が、彼にのしかかった。それにもかかわらず、滞在の終りが近かづくにつれて、なにか解釈をつけたいという彼の熱望は、ますます強くなった。ひとりで散歩の時、彼はもう一度昼間に、あの部屋の中を一瞥すべき或る方法、最も目立たない方法を、考え出そうと頑張った。そして遂に、こんなたくらみを思いついた。―それは、午後四時頃の汽車で、ここを出発することにし、貸馬車が彼の手荷物を積みながら待っている間に、二階で最後の探検をしようというのである。自分の部屋を見まわし、なにかまだ荷造りされないものが残っていないやしまいかと調べる。と、そこで、油を塗った鍵（効果上々の！）

をもつて、あのドアを、もう一度、サツと開けサツと閉じてやろうと  
いうのだった。

筋書通り、やりおおせた。―勘定は払われ、貸馬車に荷物を積み  
こまれる間、なにかの、ちよつとした話が進んだ。『この地方は楽し  
い―実に愉快でした。御亭主さん、お内儀かみさん、ありがとう。いつか  
またやつて来たいです。』と、一方が言つと、一方では、『お気に召し  
て嬉しいです。わたし達も、できるだけのことはしたつもりです。い  
つまでもお言葉は忘れません。ほんとにお天気つづきで結構でした。』  
と言う。それから、『僕はちよつと二階を見て来ますよ。本かなんか、  
落したかも知れませんか。いや、御心配には及びません。すぐ戻  
つて来ますから。』―そして、できるだけ静かに、トムソンは、例の  
ドアに忍び寄り、それを開いた。

幻滅！彼はすっかり声高かに笑い出した。つつ張っている―いや坐

っているといってもいいが、ベッドの端には、なんと、一つの案山子が置いてあるだけのことだった！

無論、菜園から、この無人の部屋に投げこまれた案山子……そうだ。だが、ここで、おかしさは止んだ。案山子が、はだしの骨張った足を持てるか？案山子の首が、肩へダラリと垂れるか？案山子が頸のまわりに鉄の輪、鎖のつなぎ目を持てるか？案山子は、たとえひどく強直こわばったものでないにしても、起きあがり、動き、揺れる首や、両脇に手をつけて、床ゆかを横切ることが出来るか？そして身震いすることが出来るか？

ドアをボタン、階段口へまっしぐら、階段の一足飛び、つづいて失神。トムソンは息を吹きかえすと、ベッツが、ブランデーの瓶をもって、上からごごむように立っていた。ベッツの顔には、非難の色がみなぎっていた。『あんなことをしちやいかんです。ほんとうに、いかにで

す。十分なことをしてあげようとした人間に、こんなことをするなんて、いいやり方ではありませんよ。』——こんな言葉をトムソンは聞いた。だが、どう答えたか覚えはなかった。この宿屋の名にかかわるようなことは、一切口外しないと、弁解もし保証もしたのだが、ベッツも、そして恐らく妻君はなおさらのこと、それを受け容れないようだった。だが、とうとうわかってくれた。汽車にはもう間にあわなかったので、トムソンは馬車で町に行き一泊することにした。彼が出かける前、ベッツ夫妻は、ほんのわずか知っていることを彼に話した。——『その男は、ずっと以前、ここの主人だったということです。そしてあの沼地のあたりを縄張りに行っていた山賊達と懇意になったのでした。それが身の破滅になりました。鎖で絞首されたのだそうですが、あなたが御覧になったあの石が、絞首台の跡だということです。ええ、漁師達がそれを取り除けたのだと思いますね。海の方からそれを見ると、漁がない



というんですからね。ええ、わたし達も、この家にはいる前に、この家をもっていた人達から、わけを聞きましたよ。“あの部屋は閉めて置け。だがベッドは持ち出しちゃいけない。そうすれば変なことはない”っていいました。それからもうなにごともし起らなかったのです。一度だってあれがこの家に現われたことはありません。たとえあれがなにかしたところで、噂は立たないのです。ともかく、わたし達がここに住んでから、あれを見たというのは、あなた一人ですよ。わたしは決してあれを見たこともなければ、見ようとも思いません。ずっとこのかた、わたし達は、厩を女中部屋にしましたので、それで面倒はなくなりました。ただお願いですから、あなたも一切黙っていてください。こんなことをしゃべられた家が、どうなるかってことをお考えになってね。』——この事実にも、もつと事実を加えて、話したのだった。

沈黙の約束は、長年保たれたのだった。遂に私がこの話を聞き出し

たいきさつは、こうだった。トムソン氏が、私の父のところへ滞在した時、彼にあてがわれた部屋へ、私が案内することになった。ところが、部屋のドアを開けようとする、彼はツカツカと進んで、自分でドアをパツとあけた。しばらく入口に立ち、蠟燭をささげて、仔細に内部を眺めた。それから我に帰ったように言った。『ごめんなさい。大変ばかげた真似で。でもわたしは、こうしないではいられないのです。変なわけがありましたね。』—そのわけを数日後、私は聞いたのだった。そして今、読者も聞いたのだった。